

「四国遍路」と「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」との協力協定締結記念

ころをつなげて、四国はひとつ

「四国遍路を世界遺産に」国際シンポジウム

日時：平成28年2月14日（日）13：30～16：33

場所：かがわ国際会議場

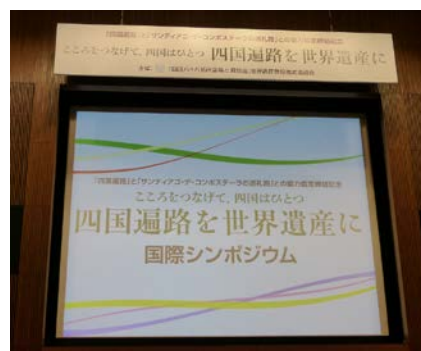
主催：「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会

内容：

13:31～13:36 主催者あいさつ 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会

千葉昭会長（四国経済連合会会長）

- ・この国際シンポジウム、四国の内外から多数の参加、ベニート駐日スペイン大使ほか多くのパネリストの方に参加いただいている。
- ・空海ゆかりの八十八箇所の霊場を巡り、1,400kmの巡拝。
- ・1200年以上にわたり民衆の中に伝えられた、四国が誇るべき宝。年間15万人の方々が遍路巡り。近年では、多くの外国の方も巡礼。
- ・四国遍路の保存のためにも、世界遺産認定となるよう様々な取組。
- ・心をつなげて、しこくをひとつ 四国の財産を表す意思。
- ・スペイン・ガリシア州との間で巡礼路の協力協定を締結。これにより、四国遍路の国際的な認知、世界遺産登録にガリシア国の協力をいただけることとなった。世界遺産登録に向け心強い味方を得た。今回のシンポジウムは、この協力協定を記念するもの。
- ・我々の課題認識、四国での気運を盛り上げるために開催するもの。
- ・世界遺産登録へ向けた大きな一歩となること、また、ガリシア国と四国の絆がより強いものとなることを祈念し挨拶とする。



13:36～ 来賓あいさつ

13:36～13:41 ゴンサロ・デ・ベニート（駐日スペイン特命全権大使）

- ・経済団体、知事、辻村先生、香川県議会議員、平井衆議院議員、関係の方々に感謝。
- ・高松は今回が二回目の訪問。またこちらに来ることができ、うれしく思っている。
- ・四国遍路との友情、交流のため、また、西村先生の話や、シングルさんの話を聞くことも目的。
- ・日本とスペインの友情について考えている。1200年前にサンティアゴの巡礼の習慣が始まった。四国遍路も世界遺産になるのではと関心を持っている。応援していく。
- ・四国遍路は1200km。フランスの道が1200km。仏教の僧侶が修行する場、8世紀から始まった歴史といわれている。コンポステーラとは共通点があるし、スペインと日本の交流は日々深まっている。
- ・スペインと日本の交流をさらに強化していきたい。日本人とスペイン人の互いの観光、年間80万人の交流があり、30%の増加。
- ・この機会を利用してスペインとの交流を深めていただきたい。

13:41～13:46 辻村修 香川県議会議員

- ・協力協定締結から5ヶ月あまりがたち、本日、協定締結を記念するシンポジウムの開催を心か

ら喜ぶ。

- ・国内外からお越しのパネラーの方々へは、心より歓迎いたします。
- ・9月1日、ガリシア州の州都で調印。1000年以上の長い歴史を有するコンポステーラに感心するとともに、行政や地域の方々の熱意に尊敬の念。
- ・四国遍路の国際遺産登録は、希望ある大きな目標であり、決してたやすいものではない。
- ・そのためには、遍路道の保全や、世界的な価値の など課題も多い。
- ・本日は、世界遺産に高い見識を持った人が一同に会し、世界遺産登録へ向けた議論がなされ、その成果には大いに期待している。
- ・両巡礼路の発展、日本とスペインの観光経済・文化の交流に大きく寄与することを確信し、挨拶とする。

### 13:46～ 平井卓也衆議院議員、小川淳也衆議院議員より祝電

#### 13:46～14:18 基調講演 「世界文化遺産の考え方と巡礼路の顕著で普遍的な価値」

○講師：西村幸夫 東京大学先端科学技術研究センター所長

- ・福岡生まれ、東京大学都市工学科卒、同大学院修了
- ・1996年より東京大学教授、2011年から同大学副学長
- ・2013年より現職 専門は、都市計画、都市保全計画、都市景観計画など、アジア諸国の都市保全計画を手がける

○武力紛争時の文化財保護

- ・「軍隊が文化財に隠れたり、武力を配備したりしないので、攻撃しないで」という条約
- ・1907年ハーグ条約
- ・1954年ハーグ条約
- ・ドゥブロニク クロアチアの文化・宝が戦争のターゲットとなり、ユーゴ軍の艦砲射撃で攻撃を受けた ← こういうことを無くそうというのがスタート
- ・アレppo城 紀元前2世紀まで栄えた城 アサド政権と反アサド政権による戦争で破壊された

○世界遺産の発想の登場

- ・1960年 ヌビア地方の文化財保護
- ・ナイル川にアスワンハイダムを造るにあたって、アブシンベル神殿が水没してしまう → 世界が協力して、エジプトの宝を世界で守った。

↓

世界遺産の発想へ

○世界遺産条約の特色

- ・「国際」から「世界」へ
- ・文化遺産と自然遺産
- ・登録基準とその条件
- ・コアとバッファー
- ・保全管理計画と6年ごとのモニタリング
- ・「負の遺産」
- ・負の遺産

・ 1031件

○本物、オリジナルとは何か

- ・ 植民地時代に改変を加えられた庭園 でも、すでに200年間この姿でみんなにみられ、使われている

○文化遺産の6つの基準

- 1) 人間お創造的才能を示す傑作
- 2) 価値観の交流
- 3) 無二の存在
- 4) 見本、典型例
- 5) 都市・集落の見本
- 6) あるものと関連している 原爆ドーム

- ・ 被災直後は、原爆ドームに価値があっただろうか
- ・ 原爆ドームの周辺には看板を出さないことを徹底。これは「努力」である。
- ・ 川沿いの遊歩道で、歩けるようになっている。 ← 戦後の広島の努力

## 2. 世界文化遺産の考え方

○世界文化遺産の新傾向

- ・ 文化的景観 コルディレラの棚田（フィリピン、1995年）とか
- ・ 産業遺産 ダージリン・ヒマラヤ鉄道
- ・ 文化の道 市場
- ・ 聖なる山 富士山
- ・ 20世紀建築 運河
- ・ 生きた活動との関係
- ・ バッファーズーンのあり方

- ・ 世界の文化遺産を守ろう → 多様性を受け入れようとの議論へ
- ・ 信仰の場は、すごい芸術的な建物や装飾がされたものだけではない

○日本での最近の取組は

- ・ 天草 崎津 天草の協会だけでなく、そのまわりの集落である「崎津」の地域全体をアピール
- ・ 信仰の道 高野山 紀伊参詣の道を拡張しようと申請中

○「文化の道」を考える

- ・ サンティアゴ・デ・コンポステーラ
  - ・ 紀伊山地の霊場と参詣道
  - ・ 香料の道
  - ・ ティエラアデントロの王の道
  - ・ シルクロード
- いずれも、文化が影響しあう道である。

○「文化の道」を考える

- ・ 交易の道と信仰の道
- ・ 文化の交流とある種の類型
- ・ 「線」としての道と「点」としての施設
- ・ 形のあるものと形の無いもの
- ・ 信仰にもさまざまな型がある
- ・ 「物語」としての普遍的な
- ・

風景をよくしていく 富士山頂に自動販売機、富士山の登山口は観光地

14:18~14:30 休憩

14:30~14:35 来賓あいさつ 加藤弘樹 文化庁文化財部記念物課長

- ・ 四国4県とガリシア州が協定を結び、グローバルな観点からシンポを開くことは大変有意義。
- ・ 各機関の取組についてパネルディスカッション。これまでの努力に対して敬意を表し、文化庁として出来る限りの支援を行っていく。
- ・ 今年度から日本遺産事業を開始。文化、伝統のストーリーを文化庁で認定し、支援していく事業。全国で18のストーリーを認定。四国では四国遍路、「回遊型遍路道と独自の遍路道」誰でもが遍路さんになって、遍路道周辺の人の接待を受け、修行、救いや癒し、自分と向き合う心の旅 他に例をみない巡礼文化のストーリー
- ・ 今後も、世界へ向けての発信に期待している。

14:35~16:30 パネルディスカッション「四国遍路の魅力と世界遺産」

○コーディネーター 稲葉信子 筑波大学教授 遺産保護、ユネスコ委員

○パネリスト 西村幸夫 東京大学先端科学技術研究センター所長

フランシスコ・シングル スペイン・ガレリア州シャコベオ文化部長 美術史

清水真一 徳島文理大学教授 日本建築史、文化財保存学

辻林浩 和歌山県世界遺産センター所長

日本考古学、和歌山県世界遺産登録推進室長もつとめる

胡光（えびすひかる） 愛媛大学教授 日本近世史

◇シングル：

- ・ 四国遍路の道は、サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路と共通点が多い。
- ・ 世界から人が訪れている。今年は、サンティアゴの扉が開かれている。聖なる年である。四国のお接待と同様に、人々がおもてなしをする。
- ・ 中世の巡礼者の絵がある。主ヤコブに会いたいと巡礼をしていた。
- ・ ヤコブは神と人間を取りなす、仲介になる人。あの世で良い暮らしができるようにと。
- ・ 文化と精神を表す道。ヨーロッパの良心を表す道。
- ・ 四国遍路は、「日本の文化の背骨」になっているということを強調すべきだと思う。その方がユネスコにわかりやすいと思う。サンティアゴも「文化の道」として認められたから。
- ・ すべての宗派のキリスト教、全ての世界の人に開かれた道。7本の道のうち3本の道は世界遺

産に認められている。

- ・四国遍路は、弘法大師から出てきた道であること、和歌山高野山との結びつきを強調すべきです。巡礼の文化を形作る、日本全体、世界に通ずるものであることを強調すべきである。
- ・八十八箇所の霊場の建築も、サンティアゴの教会の建築と同様、強調すべきです。建物が残した建築様式も残していくべき。
- ・巡礼を示した貴重な書物があると思う。
- ・国王たちが道を造り、病院を作り、宿泊施設を巡礼者のために作った。
- ・巡礼という文化を支える人々の存在も重要。修道院は、道としての文化遺産を支えてくれる。
- ・レオン大聖堂 ゴシック様式の建築 ステンドグラスが美しい
- ・サンティアゴの価値は、お接待の気持ちに象徴される。今も宿泊所は巡礼者をお接待する場所。寝るところ、食事、巡礼に必要なものを提供。
- ・コスモビジョン 宇宙観という文化的、精神的な考え方。宗教的な考えが唯一の精神的な支えだった。ヨーロッパではキリスト教、日本では仏教を軸にできあがっていった。
- ・道という苦行のあと、神聖な場所にたどり着く。教会を触ることによって感じられる心の平穏。昔の巡礼者が残していったものに、触れることができる。
- ・普遍的なものを持ちうる。巡礼者はそこを歩くことによって自分を見つめることになる。また、同行者としてのコミュニケーションも生まれる。
- ・この道が何世紀も続き、昔も同じ巡礼者が歩いたことを感じるができる。気持ちを共有できる。道が、景色が、独特なものを感じさせる。
- ・水により身を清めるということも、四国遍路と共通するところと思う。
- ・ホタテの貝殻 ゲイラの貝殻 サンティアゴ巡礼者のシンボル。元々は、サンティアゴでお土産として買って出身地に持ち帰っていた貝。精神的な回生のシンボルとして使われていた。

◇稲葉：サンティアゴの巡礼路は、巡礼路として最初の世界遺産であり、道が世界遺産になった最初であった。文化遺産は、こういうものも考えるようになったという例であり、参考になることがある。では、四国遍路はどういう道かお話を。

◇胡：「四国遍路の歴史と文化」

- ・一昨年、四国遍路回想1200年
- ・昨年は日本遺産に認定 → 四国遍路が注目され始めた

○四国遍路の原型

- ・弘法大師が42歳の厄落としに四国遍路を回ったことに一端を発する。
- ・弘法大師は、善通寺で生まれ、出家をして、四国に戻ってくる。
- ・石鎚山、室戸岬などで修行 「空」と「海」しか見えない 悟りを開いた弘法大師は「空海」に。
- ・弘法大師を慕う僧が、辺地修行
- ・衛門三郎伝説 → 死と再生の物語 石手寺
- ・1400km 4ヶ国 八十八の札所 → 道場
- ・元々はプロの僧が巡礼をしていたが、一般の庶民が巡礼をするようになった。
- ・江戸時代に真念が「四国辺路道指南」 ← 一般の僧が、庶民でも巡礼してもらえるようにガイドブックを作った。



## ○四国八十八ヶ所

- ・宗派もさまざま、神社も礼所になっていた。
- ・これら多様な宗派を束ねていたのが弘法大師。本堂と大師堂を巡る。
- ・大師堂では、かつてはお遍路さんが泊まったりお接待をしていた。
- ・歩き辺路で亡くなった方のお墓も作られている。
- ・お遍路さんが残したたくさんの遺物もまつられている。

## ○アンケート

- ・自分の生き方を見直したい、救われたい、癒されたい
- ・**ニューヨークタイムズ 世界で訪れたい52箇所に四国辺路が選ばれた**
- ・**周遊型の巡礼、何度もまわり、庶民のために作り、庶民がまわれるように四国の人たちのお接待が大事。**
- ・修行、巡礼の姿は今も生きることが特徴。
- ・紀伊山地 サンティアゴの巡礼道 四国遍路の特長を明らかにするためにも、比較と研究が必要。
  
- ・四国の自然、弘法大師信仰、庶民の文化、再生の物語、未来へも続いていく
- ・**四国辺路はまさに四国の文化であり、その地の景観、自然、風習が価値を生む。**

◇稲葉：どこをきちんと取り上げて「骨」にしていくのかを考えないといけない。きちんとした調査研究、議論が必要。

◇清水：日本建築史が専門。四国遍路の特色と保護すべき遺産

○何を残してきたか

○文化遺産として何を残したいか

○世界遺産として何が求められるか

## ○四国遍路の特色

- ・民間信仰（弘法大師）
- ・巡礼形態（典型的回遊型 or 独自性の強い周回型）
- ・お接待の習俗（信仰の一部でもある）
- ・生きている伝統

物語る遺産

遍路道（路面、道標、丁石）

霊場（参道、石垣、仏堂、寄進石造物）

伝統的景観（自然石を含む）

接待・宿泊など（茶堂、駅道寺、町並み）

## ○評価基準

- 1) 人間の創造的才能を表す傑作
- 2) ある文化圏内での価値観の交流を示すもの 巡礼形態の発展、庶民化
- 3) ある文化的伝統の物証として無二または希有な存在 **巡礼形態（周遊、どこからまわってもいいし、何回まわってもよい点がユニーク）**

- 4) 歴史上の重要な段階を物語る建築、その集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本 巡礼大衆化の時代背景
- 5) 土地利用の形態、人類と環境のふれあいを代表する顕著な見本
- 6) 生きた伝統、思想、

#### ○四国遍路の歴史（近世以降）

- ・各藩における領内社寺の復興（～17世紀中）
- ・巡礼の大衆化（17世紀後半） 社会の安定
- ・大地震などによる災害の復興
- ・神仏分離、廃仏毀釈
- ・霊場の復興（明治期）  
↓
- ・危機を乗り越えてきた伝統として評価する

#### ○対象とすべき資産の時代範囲

- ・以下の要素が保たれている状態を生きている伝統と捉えると、  
歩き遍路  
伝統的景観  
自然との調和  
お接待  
↓  
これらが保たれていた時代とは、昭和初期頃までの寺院境内景観、茶堂などが構成資産となりうる。
- ・高松で水道が通ったのは大正であり、明治は江戸時代と大きな変化はなかった。

#### ○平泉の取り組み

- ・10年以上かかって世界遺産登録。意図がうまく伝わっていないので、今でも追加登録の取り組み
- ・暫定一覧表に載ってからも、毎年、文化フォーラムの開催、研究レポートを出し、学術レベルで情報の共有、次期研究の方向付けを議論している。
- ・世界遺産委員会で記載延期決議が出されると、さらに幅広い、俯瞰的な視点から学術的に、しぶとく研究を続けながら、登録を目指している。

◇稲葉：文化庁にいらっしゃったときに、文化財であるということ、保全の措置が行われていること。登録が終わりではなく、申請書を作られるところから、保全の取り組みについてのお話まで、お願いします。

◇辻林：

#### ○世界遺産登録への経緯

- ・議会答弁での、「世界遺産登録に取り組みます」との知事の返答からスタート。職員は世界遺産のことを何も知らなかった。
- ・国内暫定リストに、たまたま載ることができた。 → **3県による「世界遺産登録推進協議会」を発足。**

- ・一番大変な仕事は、3県にまたがっているので、足並みをそろえること。ほぼ毎週集まることを行ったが、温度差があった。頻りに集まらないと意見はまとまらない。県内の市町村数が多いことも、なかなかまとまらなかった。

#### ○普遍的価値

- 1)
- 2) 紀伊山地の文化的景観を構成する記念物と遺跡は、東アジアにおける宗教文化の交流と発展を示す新道と仏教との比類のない融合を示す所産である。
- 3)
- 4)
- 5)
- 6)

#### ○紀伊山地の霊場と参詣道

- ・6～7割の延長で、ぶつ切りでの遺産登録となっている。
- ・「昔の趣がない」ということで、指定外となっている。
- ・舗装した部分は指定区域からはずされる。
- ・近畿の河川局は川幅全域を指定させてくれなかった。川の中に10mほどだけ、ここは右岸に、ここは左岸にと指定。
  
- ・昭和30～40年頃、集落の再編が行われたときに、まちの中央部に集落が集められ、道の保全がなされなかったことから、道が痛んでしまった。
- ・これから、どうやって指定された資産を守っていけるか。企業や学校のボランティアにより、道の修復をしている。
- ・周辺地域の文化財の調査がなかなか進んでいない。地域文化を残していくことも考えていかなければならない。
- ・地元の方々のご協力をどれだけいただけるか、

◇稲葉：道が複雑でわからないとの指摘があった。4つの県をきちんとまとめることが大変重要。紀伊山地の時は、何を価値として訴えていくか、良いところを切り出してアピールできた。四国遍路は何を価値として打ち出していくか。

◇稲葉：世界へ打ち出していく価値についてご意見を。

◇西村：

- ・辻林さんの話、今後のことで道普請。増えてきている。道を維持するには歩いてもらうことが、知ってもらうが一番で、良い方向へ向かっている。
- ・胡さんの話、再生 富士山も信仰の山として再生。山頂には草も生えない死の山で、そこから帰ってくる再生の山というと、世界の人もわかりやすい。
- ・四国遍路も、単純に「再生」とは言わず、何を特徴として打ち出していくか、差別化していくか。

◇胡：巡礼、宗教的なことを考えると「救済」。誰が救済してくれるのかと巡礼さんに聞くと、四国



の自然に、四国の尾お待に、そして御大師様が救済していく。

◇稲葉：シングルさん これまでの発表を聞いて、補足がありましたら。

◇シングル：

- ・四国遍路を世界遺産として進めて行くには、特色を出していかなければならない。建築物というだけでなく、人々がどういった思考、世界観を持っていたか。精神文化の本質に迫っているということ表現しなければいけない。空海、和歌山熊野古道を研究することが大事。巡礼道を見る、標識がしっかりでていること、お接待を強調していくこと。
- ・普遍的なおもてなしの気持ちは、世界中にあると思う、慈悲
- ・人間の創造物であって、自然の景観があるとうこと。単に自然があるということではなく、ある精神性があり、自然から文化を読みとることができるということ。
- ・四国全体からこういったことを読みとることが大事であり、世界遺産登録に助けになると思う。

◇稲葉：清水先生 平泉では平泉文化を訴えようとしたが、中国からの文化がどう変わってきたかというところに行き着いている。四国遍路では・・・

◇清水：

- ・サークル状にまわるということがユニーク。番号はついているが、これは関西方面から来る人へのガイドブックであり、どこからスタートしてもいい参拝道。
- ・ウリとしては、「生きている」という性格を持っている。

◇稲葉：生きている、あるいはものに属さない 6番に関わりがあるということですかね。

◇清水：お接待そのものは珍しいことではないが、根強く今日まで続いていることを落としたい。しかし、お接待は示しにくく、作動などに目を向けていくことが必要かと思っている。

◇稲葉：お接待をどう表現するか、ものを探していく必要があるが。胡さん 生きているお接待という文化、近世から現代に生きる文化、何をもって四国遍路の価値とすればいいか。

◇胡：

- ・サンティアゴ巡礼 違いがある中でも共通点があるとの話。武器を持っているのは人を殺すのではなくみんなを守るための刀。
- ・熊野古道 いろいろな宗教をまとめるところも似ている。
- ・清水先生 「巡礼の最後の発展形態ではないか」との意見。遍路と呼ぶのは四国遍路だけ。日本の巡礼の最終形態ではないだろうか。

◇稲葉：歩いて修行をしながら人生を考える、そういうものの最終形態。四国遍路の価値を考える上で、宗教を越えていることから何か知恵は。

◇辻林：聞けば聞くほど、四国遍路は同じではないかと思う。

◇稲葉：現地を訪れて思われたこと。世界遺産は物があって初めて。現地を訪れた、四国遍路の価

値というものは。

◇シングル：

- ・最初に注意を引かれたのは「**自然**」があるということ。ガルシアの自然ととても似ている。この聖なる道と、いろいろな道しるべ、お墓もある。巡礼で亡くなった方、僧侶の墓があり、最終的に八十八のお寺がある。これは文化が精神と結びついたもの。**信仰を物質的なものにするための道具に使っているのではないか**。道を通るといふ儀式的な事柄が、誓いとなっているのではないか。様々な寺をまわること、水を使い浄化することが、根底にある世界観を表しているのでは。
- ・芸術的で、文化的な遺産として寺、墓、標識などがある。

◇稲葉：西村先生 世界中の遺産や審査に関わってきて、一言。

◇西村：

- ・熊野古道 追加登録に関わっている。**高野山へ行く道は何本もあるが、どれが信仰の道で、どれが生活のみ地下、それがわかる**。信仰の道には、道標やお墓があり、確実にわかる。道にはいろいろな思いがあり、痕跡があり、祈りの道がわかる。それが、森に戻っている道でもわかる。
- ・**生きている道なら、そういうものが表現できるのではないか**。もう一度光を与えることが大事、説得力を持つのではないか。

◇稲葉：

- ・紀伊山地より四国遍路の方が長い。**価値を探しながら、本物を探ることが大事**。上っ面ではない本物であること、それが見つかった時点で、地元の財産になっていく。
- ・海外から注目される「お接待の文化」を、世界に広められていくと同時に、世界遺産を目指すのであれば、**本物に基づいた調査をしっかりと行い、一つのストーリーにする**。
- ・四国遍路は、文化庁の調査で良いところまではいった。
- ・両輪 **価値を見つけること 保全の措置をとること**  
**4県が連携がとれていることが大事**だと思う。

16:31～16:33 閉会あいさつ 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会

浜田恵三副会長（香川県知事）

- ・四国遍路の価値の高さ、世界遺産への手応えを感じることができ、厚く御礼申し上げます。
- ・世界遺産登録へ向け、四国全体でなおいっそう盛り上げていくことが重要。四国一帯となった取り組みを進めていくのでご協力を。

—以上—